

唯識三類境義について

—特にその日本の講字について—

稲垣淳造

玄奘相伝の伽陀に「性境不随心 独影唯従見 帶質通情本 性種等隨心」と伝えるものがある。識が働く時四分となるのであるが、所縁の対境たる相分の性質を更に詳細に検討し、性境・独影境・帶質境の三種に分類をし、いづれも唯識所變の理を離れぬことを論ずるのである。

この三類境説は、思想的には、一つは識變の相分に因縁變・分別變の區別を立てようとする立場、今一つは相分・見分の種子の同異を論じようとする立場、の集大成として創出せられたと言えよう。これは印度諸論師の思想を基盤として、玄奘が整理したものと云へるのではないか。更にこれらは中国に於いて慈恩・惠沼等により一応の綱格を整えしめられ、日本法相宗に於いて更に内容的に深められてゆくのを見ることが出来る。

二

(一) 性境とは、『了義灯』によれば実種所生・有実体用・得境自相の三義を具するものであると言ふ。この三義の内、後の帶質境にあつては実種所生の義のみがあり、独影境はいずれの義も有しないのである。この性境となるものは、(イ)第八所縁三種の境(種・根・器)、(ロ)前五識心所々縁の相分(五塵)、(ハ)五俱同縁意識心心所々縁相分、(ニ)有無漏定心所縁相分、(ホ)無分別智所縁の

真如、(ヘ)後二分所縁の対境(北寺伝のみ)等である。次にこの性境には、伽陀の文句に従つて三不隨の義(極要上末)が説かれる。一は性不隨。能縁心は善悪なりとも、対境恒無記にして、能縁心に従はないを言ふ。二は種子不隨、所縁の境(相分)には自ら能生の種子があつて生ずるものにして、能縁の境(見分)の種子より生ぜしものではないことを言ふ。三は界繫不隨。欲界繫の能縁五・六(五俱)・八識が、同界五塵を縁する時、所縁の五塵は能縁に隨つて欲界繫となるのではなく、自ら欲界繫なるを不隨という。

(三) 独影境とは、能縁見分の分別力を以つて変現せる影像相分を言ふ。この境となるものは、(イ)第六識が無法を縁せる相分(龜毛等)、(ロ)第六識が假法を縁せる相分(過未等)、(ハ)第八識相應の心所の相分(種根器)以上は無本質である。(ニ)凡智縁如の相分、これは有本質であるが真如凝然として兩者互いに疎なれば、能縁の分別力によるものとして独影境に分類される。これらはただ能縁の見分に従うものであるから「唯従見」と説かれるのである。次に、前の性境三不隨心に対して、この独影境には三隨心が説かれる。能縁の心とは見分を指すのであるから「従見」とは「隨心」に同じである。一は性隨心。独影境は自体なく能縁の見分に従つて何れの性ともなる。二は種隨心。この境は自体無く、微弱なれば種子を熏ずることが出来ずに、能縁の見分の種子に付帶して生ずる(宿借種)が故に見分に従うとする。これは相見同種生と称せられる。三は繫隨心。自体無ければ能縁の見分に必ず従う。(三) 帶質境とは、相分が本質を有しながら、能縁の心は現量の得に非ざるために縁せる本質相似の相分を言ふのである。これにあたるものとしては、(イ)第七識見分が第八識見分を本質として縁する時の相分、(ロ)独頭の第六識が有体法を縁する時の相分、(ハ)第

六意識が五根・七心界を縁する時の相分等である。この境も又、伽陀に従って三種通情本が言われる。情とは能縁見分、本とは本質である。一は性通情本。第七見分が第八見分を縁せる相分について言えば、第七見分は有覆無記、本質たる第八見分は無覆無記であるが、第七相分は両者いづれにも通ずると言うのである。二は種通情本。この境の種子が先の如く見分・本質に両通であるとする。三の繫通情本も亦先に同じである。ただし種通情本については論議あり、『同学鈔』一の十に詳し。

以上三類境を概観して示せば次の表のようになるであろう。

	八	識	三	性	三	量	本	質	相	見	分	種	二	變
性	境	前五、六、八	依・円	現	量	無本質	有本質	別	種	生	因	緣	變	
独	影	第六	遍・依	非	量	無本質	同	種	生	分	別	變		
帶	質	第六、七、八	依・円	比	非	量	有本質	兩	種	生	因	緣	變	

(注) 独影境の内、凡智にて真如を縁する時は有本質となる。その他詳細は省く。

以上の三類境を整理すると、独影境はただ幻覚に等しきものにして本質無く、唯識所変である。帶質境も有本質なれども相似の相分たるにとどまり、唯識を離れるものではない。更に性境のみ実用ある境なれども、第八心王の所変は無本質にして唯識を証し、有本質たる前五識心心所々縁の相分等も、第八識所生の種子を本質となすものであり、畢竟して唯識所変を離れるものではない。又真如等を縁する時は、真如擬然にして唯識を障せず、無漏にわたれる時も転識得智せるものであるから、やはり唯識を離れるものではない。

三

以上の如き三類境の説は『枢要』『了義灯』等中国の文献の他に、多く詳細は日本の『同学鈔』によったのである。これにより詳細な日本唯識の講学の特徴を窮知できるのであるが、更に『同学鈔』を見ると南北両寺伝の相違を見ることが出来、両寺講学の傾向を知り得る。今その内一・二を概観して見る。

一、三類境は後二分にも通ずるとする説

三類境は四分中の相分について言うとするのが中国以来の説であり、南寺に於いてもこの立場を崩さない。然るに北寺に於いては「総撰諸境有其三類」「以此一頌定諸法体」とある『枢要』の文を証として後二分の所縁境、即ち自証分の所縁たる見分・証自証分、証自証分の所縁たる自証分についても三類境を分類し、唯識の証明に資すると説くのである。

二、随心の性境ありとする説

先にも見る如く性境は三不随の義ありとするのが南寺の説であるが、必ずしもそうではないとして、随心の性境を立てるのが北寺の説である。性境となるべき第八識所縁の三種の境の内、種子については種子と界繫とは心(見分)に随はず、三性については心に随うとする。又五根・器界については種子は心に随はず、三性と界繫とは不随心の義が無く、随心の性境であるとするのである。

以上の他にも幾つか相違を見るのであるが、玄奘直門に参じた道昭の伝える南寺伝(元興寺伝)が保守的であるに對して、玄奘―慈恩―慧沼―智周と次第する第三祖智周に学んだ玄奘の流れをくむ北寺伝(興福寺伝)が進取的な学风を伝えていることも、日本法相教学史の一側面として理解しうるであろう。